

## 計画対象の表示の実現

谷口興紀\*

### Towards the Referential Realization of Image in Design Process

Okinori TANIGUCHI

#### ABSTRACT

In the preceding paper, I discussed the logical ontic character of the image-describing word (or singular term) and possibility of the elimination of the image-describing word. And I suggested the concept of "all of the worlds which are compatible with the world of 'I'" would give us possibility of detaching the image from a designer. Here, details of the procedure, using such concept, is described and the limit of such concept in the referential realization is discussed. Finally it is discussed the imaging takes the role of the fore stage of the referential realization as the general existentialization.

はじめに：先に計画における意義行為と表示行為について述べたが、<sup>1)</sup>それらの関係について可能な世界の意味論という観点からと証拠の規則という観点に触れ、後者については、若干の批判をしておいた。ここでは、前者の限界を指摘し、時制論理という観点からの考察を試みる。

意義行為と表示行為との関係は、設計—計画における計画対象の実現—狙っているものが現実化される（または現実化への道が開かれる）ことを仮にそう呼ぶ—という場面に如実にあらわれると考えられるので、そのような場面を表示行為的観点、すなわち言葉の表示機能を通じて分析する。このことは、逆に計画対象の実現における言葉の（表示）機能の限界を明らかにし、計画対象の実現のメカニズムの研究への手懸りを与えることともなる。

このような研究の計画論的意味は、建築計画における計画者の狙いとか、またもの意味のようなりわけ計算にのりにくいと考えられているものを取り扱うときの基礎的な考察にかかわってくると考えられる。

### 1. 計画対象のイメージの表示的（非）存在性

ここで言う計画対象は、計画対象が先づあって、それに計画者がかかわって計画ができ、計画対象が実現するという考え方における意味ではない。計画者が立ち向うものを対象という場合もあるが、ここでは、そのような計画行為の意識の対象というよりは、時空的に実在化された対象、いわば事物のようなものを計画対象と呼ぶ。そうすると、「計画対象は、そのイメージが、はじめに心の中に存在しており（A）、それが計画が進むにつれて、はっきりとした形として図面等によって外在化される（B）」という言い方の「計画対象」はこの規定にあてはまるが、後半の外在化されたものは、未だ建設されていないが故に事物化されていないと言えるが図面等によって外在化された時点で現実化への道が開かれていると言える（たとえば、設計図を読み取って建物を自動的につくるロボットは思考実験的に考えられよう）ので、計画対象は実現されたと言う。

上述の（A）の「イメージとして心の中に存在する」という言い方を表示性という観点から Quine にのって分析してみよう。<sup>2)</sup>彼は、たとえば「私は白い家を狙う」という文において、この狙われている「白い家」は何を意味するかと問うた時、この文が無意味とならないためには、「白い家」に対応するものが存在しなければならぬ、称呼的に（allegedly）名ざされた白

い家は時空的に存在していないことは明らかなので、「白い家」の意味を心の中にある観念として説明しようとしていることを指摘する。

一般的には、たとえば、欲求や製作その他の活動に対しても、その対象があると考えてもよいと言われるが上述の心の中の観念を計画過程においてそのまま取り扱おうとすると非常に困難である。仮にそのような白い家は、現実化されない可能なもの（unactualized possible）というような存在性格を持つとしてみよう。計画が進むに従って可能なものが、やがて現実化され確固とした対象となり、計画対象として実現されたと言えるようになる。けれども、このような考え方は、たとえば、「私は赤くて白い家を狙っている」と言う場合に破綻をきたす。そのようなものを現実化されない可能なものとして認めたとしても、いつになっても現実化されないであろう。すなわち現実化しえない不可能なもの（unactualized impossible）である。そのようなものを狙ったとしても、計画行為が終了した時、何が実現されているのだろうか。それとも計画行為は終了せずに破綻をきたすのであろうか。また、そのような不可能なものの存在は認めないと言うのであろうか。心の中に存在するものと心の中に存在しないものとはどのように区別するのであろうか。「私は赤くて白い家を狙っている」という文は、無意味としてしりぞけるのであろうか。たとえば、論理的に矛盾しているもの（白くて且赤い（白くないの一例として））を狙う場合には、心の中にすらそのようなもののイメージは存在していないと。Quine は次のような考え方を提する。<sup>2)</sup>すなわち、

- i) 個別名辞がその名前である存在者の存在を前提にすること無しに文の中で個別名辞を有意義に使うことができる。それは、Whitehead-Russellの個別的記述理論とQuineの記述の消去理論によって保証される。
- ii) 記述または一般名辞も、抽象的存在者（たとえば、あるものは犬であるという時、犬性のような抽象的存在者）の名前であることを認めること無しに使うことができる。一般名辞は、名前ではなく、表示することを意図しない。それぞれの一般名辞は個々の対象について真であると考えられる。
- iii) 意味と呼ばれる存在者の領域を容認することなく、表現を有意義な（significant）ものとして、または相互に同義的（synonymous）ないし、異義的（heteronymous）なものとして語るができる。言語的表現が有意味であるという事実は窮極的であり、還元不可能な事実である。

言い換えれば、言語表現の意味と名指しを区別し、名指すものすなわち表示対象が存在しなくても、言語表現は有意味なのである。名指しを意図した（または、表示を意図した）がそのような対象は存在しないだけである。上述の「私は白い家を狙っている」は、この「白い家」の位置は表示的に不透明であるが、透明にするためには、複合的一般名辞と考えればよいとする。すなわち、「①は私であり、そして、①は白い家を狙っている」という開放文の①の所に入る対象の存在についてのみ関心を向ければ良いことになる。すなわち「イメージとしての白い家は存在する」と考える必要はなく、たとえば「イメージする心が存在する」のであり、「心が存在する」とはそのような心的活動が存在するのである。心的活動が存在するとは、そのような心的活動をする身体が存在するのであるということになる。これは、①の所に入る対象としての「私（の身体）」の存在性に帰結し、計画対象について語ることは、私の存在性について語ることになる。また私が存在するということは、私が実現されたことになる。したがって、計画対象について語ることは、そのような対象を狙う私の実現について語ることになり、いわば自己実現が主題となる。計画対象の存在性を問題にすると、ここでは「私」の存在性または実現性の問題となる。

一方（B）の外在化された対象は、たとえば「白い家が在る」という文は真偽が言えるとして表示的に透明である。そうすると（A）と（B）との関係はどのようにつけられるであろうか。白い家を狙っている私と、ここに白い家が在るという現実世界との関係は、単に私がこの現実世界に含まれているという関係だけであろうか。

## 2. 表示を意図された計画対象の消去

（A）と（B）との関係づけとして「私は白い家を狙った、そして、今日の前に白い家がある」という言明を考えて見よう。この場合一方は過去時制で、他方は現在時制である。Quine に従って時制を消去した言い方に言い換えると「私は $t$ において白い家を狙う、そして、今の私の目の前に白い家がある（C）」となる。この $t$ を今を含む持続と考えれば、二つの事象は、重複した輪郭を持つ。けれども、そうは言っても、前半の文にあらわれている「白い家」（これは表示を意図された対象—もちろん存在しているとは言っていない）と後半の文にあらわれている「白い家」とは関係づけられているとは言い難い。というのは、そもそもこのような問い方が成立しないからである。たとえば「私は白い家を狙う」の複合的一般名辞「①は白い家を狙う」と「私は青い家を

狙う」の複合的一般名辞「①は青い家を狙う」との相違が、我々が漠然と思っているようには問えない。我々が漠然と思っていることは「①は白い家を狙う」と「①は青い家を狙う」とは「①は $x$ を狙う」の $x$ が、一方は「白い家」であり、他方は「青い家」であるということであろう。ところが複合的一般名辞であるということの意味は、そういう考え方を拒否する。「①は白い家を狙う」と「①は青い家を狙う」との相違を上のように論ずることは、たとえば「①は高い」と「①は赤い」との相違について、前者は「①は $x$ かい」のところに「た」が入り、後者は「あ」が入ったものであると論じているに等しい。「た」と「あ」の相違は、「高い」と「赤い」との相違とは全く次元の異なる事柄であろう。したがって複合的一般名辞と考えることは（C）における「白い家」の二つのあらわれは、同じものの二つのあらわれとは言えないような取り扱いをすることが求められている。「①は白い家を狙う」という複合的一般名辞を採用することによって、「白い家」のイメージという対象の存在を消去することができたが、現実的な「白い家」との関係を考える道をも捨ててしまったことになる。白い家を狙ったということは、私の歴史性の中に埋め込まれていて、今私の目の前にある白い家とのかかわりは、間接的に私を通じて問えるとも言えるかもしれないが、それは、いわば出発点に引き返すことになろう。

## 3. 計画対象を表示することを意図することと実現された計画対象との（非）同一性

前節までのイメージそのものの表示的存在性の否定的見解を考慮して、ここでは、「イメージを持つことを意図すること」を、「イメージすること」と呼ぶ。そして、イメージすることと実現されたものが、最初のイメージと同一であるかという問の再解釈である。

二つのイメージすることの間の同一性を問うことはできない。たとえば、肥った人があの戸口に立っているとイメージしてみよう。そして、さらに禿頭の人もあの戸口に立っているとイメージしてみよう。その時私は同一の人をイメージしているのか、それとも二人の人をイメージしているのかという問に対して、同一人をイメージしているとするか二人の人をイメージしているとするのかは全く恣意的であり、私の自由裁量による。同様に、「白い家を狙っている」においても、それが広い家を狙っているのか、狭い家を狙っているのかと問えば、それらに対して恣意的に答えられる。広くて白い家を狙うことと狭くて白い家を狙うこととのどちらを私が行なっているかと問われた時、どちらかにきめれば良いことであ

って、「白い家を狙っている」からは出て来ないだろう。どちらをイメージしようとするかであって、どちらをイメージしているかを他から調べようもない。それに対して、実現されたものまたは現実的な家については、広いか狭いかは調べてみれば何等かの答えは出てこよう。同様に、あの戸口に現実にある人が立てば、たちどころに同一人か二人のかは答えられよう。このようにイメージすることについては、多くの性質を投げかけることによって、はじめて細部的にイメージすることができる。最初のイメージすることを眺めているだけでは、イメージすること自身は動かない。

したがって、最初のイメージすることと実現されたものが同一であるかと問うことは、同一性が事物的に同一かということであるならば、同一とは言えない。イメージすることは、事物を一つの側面からしかとらえていないが、その一つの側面だけからのみ成り立つ事物は考えられない。他の多くの側面が付け加わって事物は構成されている。そのためその一つの側面を持つ事物は数多く存在するだろうから。したがって、その一つの側面が実現されたものに含まれているかという意味だとすると、もし含まれているなら肯定的に答えられ、そうでなければ同一でないと言えられるが、一般には、イメージに合わないという言い方がなされよう。

#### 4. 「可能な世界」の意味論による計画対象の表示の可能性

先に「私は白い家を狙う」という文は、もし話者がその信念を持つことと相入れる多くの可能な世界から、話者が同一の個体を取り出すことができるならば、「私は $x$ を狙う」というように置きかえて、あるもの $x$ が存在する、すなわち量理化理論で表現できるということについて述べた。<sup>1)</sup>それは上述の(A)の場面にかかわり、(B)の場面への移行を目指したものである。ここでは、その点をより詳細にみよう。

Hintikka による次の例を取り上げる、<sup>4)</sup>すなわち、  
 (1)  $N(a=a) \supset (Ex)N(x=a)$   
 ここで、 $a$ は個別名辞であり、 $a$ =アメリカの大統領とし、 $N$ :必然的 という様相記号とする。(1)の前件は、必然的にアメリカの大統領はアメリカの大統領であると言っているから真であり、後半は、あるもの $x$ が存在し、必然的にそのものはアメリカの大統領であると言っている。この後件は偽である。すなわち、大統領候補者が存在していて、その人が大統領に選ばれたとしても、それは必然的とは言えない。日常的には、確実に大統領に選ばれるだろうという予測が立つかもしれないが、必然

的とは考え難い。必然的(の解釈)とは、どのような場合においても成立しなければならないから。したがって全体として(1)は偽である。ところが、次のような道具立てによると論理的に真である。すなわち、ある論理式の真偽は、次のようなモデル集合とモデル集合系の中に埋め込まれるか否かによると定義し、モデル集合とは次のような条件を満足する論理式の集合 $\mu$ とする。<sup>4)</sup>

- i) (C.  $\sim$ )  $p \in \mu$ でないなら、 $\sim p \in \mu$  ( $p$ は原子文または同一性文)
- ii) (C.  $\&$ ) もし $(p \& q) \in \mu$ ならば、 $p \in \mu$   
 $q \in \mu$
- iii) (C.  $\vee$ ) もし $(p \vee q) \in \mu$ ならば、 $p \in \mu$   
または $q \in \mu$  (または両者)
- iv) (C.  $E$ ) もし $(Ex)p \in \mu$ ならば、少くともひとつの個別名辞 $a$ について  
 $(a/x) \in \mu$
- v) (C.  $u$ ) もし $(ux)p \in \mu$ であり、そして個別名辞 $b$ が少なくとも $\mu$ の中のひとつの式にあらわれるならば  
 $p(b/x) \in \mu$
- vi) (C. self $\neq$ ) ' $b \neq b$ '  $\in \mu$ でない
- vii) (C.  $=$ ) もし $p$ が原子文または同一性でないなら、もし $p(a/b)=q(a/b)$ 、  
 $p \in \mu$ 、 $(a=b) \in \mu$ ならば、 $q \in \mu$

モデル集合系とは次のような条件をみたす二項関係をもつモデル集合の集合 $\Omega$ である。

- viii) (C.  $M^*$ ) もし $Mp \in \mu$ 、 $\mu \in \Omega$ ならば、 $p \in \lambda$ であるような論理式の集合 $\lambda$ が $\Omega$ にある。(  $\lambda \in \Omega$ 、この $\lambda$ を $\mu$ の代替という )
- ix) (C.  $N^+$ ) もし $Np \in \mu \in \Omega$ 、 $\lambda \in \Omega$ が $\mu$ の代替であるならば、 $p \in \lambda$
- X) (C. refl) 代替関係は反射的である

更に、論理式の集合 $\lambda$ の充足性は、モデル集合系 $\Omega$ のあるメンバー $\mu \supseteq \lambda$ 、 $\mu \in \Omega$ への埋め込み可能性と定義され、論理式は、その否定の単位集合が充足可能でないならば、論理的に真であると言われる。

モデル集合は、世界の部分的記述であり、モデル集合系のメンバー(たとえば、 $\mu$ )の代替は、 $\mu$ によって記述された世界'の代替的'世界の記述と考えられる。このようなモデル集合とモデル集合系の特徴は、<sup>4)</sup>

- i) 我々は、おのおのの個体と我々が考えたい他のタイプの実体に対して有効な名前を持つという無害な仮定をしている。この簡単な仮定の主要な効果

は、我々は大抵の場合、あるより単純な文に対する真理条件の言葉で、非常に容易に、異なった種類の文の真理条件を定式化することができる。

ii) 個別名辞の適当な供給を必要とする理由は、上述のより単純な文が、しばしば個別名辞のある特定の種類について、もとのものの代入例であるからである。

iii) 勿論その真理条件がこのようなものに還元されないタイプの文、すなわち原子文と同一性文がある。また、少なくともこの世に一つ個体が存在するという存在仮定を捨てることは、還元されない文、すなわち  $(Ex)(x=b)$  のような形式のクワイン的文を加えることによってなされる。

(1)の証明は次のようになされる。すなわち、(1)の否定の単位集合が、モデル集合へ埋め込まれないならば、充足可能でないが故に(1)は論理的に真である。すると(1)の否定を得るため、(1)を変形する。

$$(1') N(a=a) \vee (Ex)N(x=a)$$

$$(1'') M(a \neq a) \vee (Ex)N(x=a)$$

この否定をとると

$$(2) N(a=a) \& (ux)M(x \neq a)$$

したがってこれから構成されるモデル集合、モデル集合系を、 $\mu, \Omega$ とすると(C. &)より、

$$(3) 'N(a=a)' \in \mu \in \Omega$$

$$(4) '(ux)M(x \neq a)' \in \mu \in \Omega$$

$$(5) 'M(a \neq a)' \in \mu$$

ここで(5)の左辺と(3)の左辺とは互いに否定関係にあり、しかもそれらが同一の集合 $\mu$ のメンバーであることを(3)と(5)とが主張しているが、これは(C.  $\sim$ )に反する。よって(1)の否定の単位集合は $\mu$ へ埋め込み不可能である。すなわち(1)は論理的に真である。けれどもこれは直観的結果に反する。(1)の前件が真であると考えerということは、 $'a \neq a'$ を主張することが真であるような可能な世界は考えられないということである。一方そのようなことが成り立つ場合は、現実世界のひとつの個体が、可能な世界で二つの個体に分裂するという場合である。たとえば、個別名辞 $a$ が現実世界で目の前の机の上のもの名前であるとする。ある人 $d$ がそれを白いチョークとして見るが、短いチョークとして見ないというような可能な世界を考えよう。すると現実世界のチョークは、可能な世界の個体とは一対二の対応をしていることになる。その場合 $a$ は可能な世界で白いチョークの名前であり、また短いチョークの名前でもあるが、 $d$ にとって $'白いチョーク \neq 短いチョーク'$ であり、現実世界では両者とも個別名辞 $a$ で表示されるので、

$'a \neq a'$ と翻訳される。このような言い方がおかしいとするのは、すべての異なった世界で個別名辞 $a$ で表示される個体は唯一でなければならないと考えるからである。このことを定式化すると、

$$XI) (C, u_1) \text{もし } (ux) p \in \mu \in \Omega \text{ であり, 'x' に関して } p \text{ の様相深度 (modal profile) が } n_1, n_2, \dots \text{ であり, もし 'b' が } \Omega \text{ のあるメンバーの論理式にあらわれているならば, } (\sim(Ex)(N^{n_1}(x=b) \& N^{n_2}(x=b) \& \dots)) \vee p(b/x)' \in \mu$$

となる。すると、(4)から次の(4')が得られる、

$$(4') ' \sim(Ex)(N(x=a)) \vee M(a \neq a)' \in \mu$$

(C. v)より、

$$(5') ' \sim(Ex)(N(x=a))' \in \mu \text{ または } 'M(a \neq a)' \in \mu$$

ここで $'M(a \neq a)' \in \mu$ を捨て $' \sim(Ex)(N(x=a))' \in \mu$ をとると、(2)がモデル集合 $\mu$ に埋め込まれることになり、(1)は論理的に真でなくなり、直観的解釈と一致するようになる。(C,  $u_1$ )と同様の原理が $(Ex)Kd(x=b)$ (あるもの $x$ が存在し、 $d$ は $x$ が白い家( $b$ )と同一であることを知っている)によって定式化されていたと考えられる。<sup>5)</sup>ここでの論旨に沿って再解釈すると、何であろうとも、とにかく白い家を狙うというのではなく、確実に一つの白い家が現実世界において存在することが要請されており、それぞれの可能な世界においてその白い家は、種々に具現されてあらわれている('embodiments' as manifestations of one and the same individual)という場面を考えることになる。けれども、このような場面は、はじめぼんやりとイメージすることがあって、作業を進める間にはっきりとかたまっていくという設計-計画の過程にそぐわない。白い家を狙っているという言明を論理的に分析し、その狙われている白い家を表示しようとする、表示性という観点からは、可能な世界のひとつひとつからせいぜい一つの同一の個体を取り出すことができねばならない。そのためには、その言明は既にその時点で、事実上存在する個体を狙うことの表明でなければならないことになる。そうしてはじめて「あるもの $x$ が存在し、私は $x$ が白い家と同一であることを知っている」や「あるもの $x$ が存在し、私は $x$ が白い家と同一であることを狙っている」が言えて、白い家が表示化されると言える。これは、「存在的結論は、少なくともそのうちのひとつが(明示的にしろ、黙示的にしろ)存

在的であるような諸前提からのみ引き出すことができる」<sup>6),7)</sup>ということになる。そうすると、事実上存在するものを狙うことになると、「はじめぼんやりとイメージする」ということではなく、はっきりとイメージするが、可能な世界においてぼんやりしていると言ったほうが良い。設計-計画過程とは、このはっきりとイメージすることのぼんやりしたあらわれ、可能な世界におけるぼんやりしたあらわれをはっきりしたあらわれにすることであり、多くの代替案の検討とは、代替的世界の構成であり、そこから具現化されてあらわれている同一の個体の取り出しである。そのあらわれは、ぼんやりしていたり、部分的なものであるかもしれないが、とにかく同一の個体のあらわれとして取り出すことができるならば、それは表示化され、存在的に一般化されて語られる。この取り出しは、個別名辞の使用により、言いかえれば固有名をつけることによって、ひとつには行なわれる。

ここではじめの(A)の場面と(B)の場面との関係についてみると、(A)の場面の表明としての「私は白い家を狙う(A')」という所謂命題的態度の動詞を含む文における「白い家」の表示性と、「白い家が目の前にある(B')」の「白い家」との関連を見出そうとすると、(A')において、既に事実上(現実世界において)白い家が存在していることが要請された。(可能な世界にのみ存在するとしてもやがて、(B')との関係を問うと同じことになる)したがって、(A')が表示的に真であることの中に(B')の成立も含まれてしまっている。そのようなことの起るのは、ここでの議論の大前提である、所謂見せかけの現在(specious present)で各文を取り扱うことによる。<sup>6),11)</sup>すなわち、言明間の物理的時間的距離の相違を無視し、見せかけの現在にあるひとまとまりの事象として(A)や(B)の場面を考えることによる。そこで、(A)と(B)の場面は、時間的に差があるという観点を導入した場合どうなるであろうか。

##### 5. 計画対象の表示を意図することの性格

計画対象の表示を意図すること、すなわちイメージすることの、計画対象の表示化に果す役割を規定することによって計画対象が実現される前後の状況、すなわち上述のA'とB'との間に時間差を考えた場合、計画対象の実現はどうなるであろうか。

仮に「白い家」が創造されたとしてみよう。そうすると、Prior にならって創造以前の世界には、「白い家」によって表示されるもの(個体)は存在しないと考えねばならない。<sup>8)</sup>さもなくば、何ものかから創造されたことになり、そのものは何時創造されたのかと問える。した

がって創造される以前の個体とは、個体とは言えないようなものである。— または、個体として弁別されないようなものでなければならぬ。創造された後ではじめて個体として識別されるようになるにせねばならない。ここでいう創造とは、神による創造をいうのではなく、創造以前とは、万物の存在以前をいうのではない。イメージすることは存在し、そのことと現実世界の対象との関係を問うている。たとえば、ある人に馬を一頭贈ることを約束するとしよう。「私は貴方に馬を一頭贈ろう」と言い、しばらくして現実の馬を一頭贈ったとする。その場合、その贈られた馬が約束された馬であるか否かを問うことは意味をなさない。約束する時に贈り主は、確かに馬のイメージを持っていたであろう。贈られる方も馬のイメージを抱いていたであろう。けれども贈られてきた馬が、あの時イメージしていた馬と同一であるか否かを問うことは無意味であろう。贈られたものが牛であったなら、これは約束されたものと異なるのではないかと問うことはできる。このイメージしたものと実現されたものとの同一性は、イメージしたものは非存在で、イメージすることが存在するという3節の議論からも、問いにくい。ただイメージすることによって、実現されるものの大体の見当なり、ある確定的な範囲が、輪郭線はぼんやりしていてもあると言える。現実化された対象についてその範囲に入るか否かは言える。設計-計画の過程において、ある案を見てこれではないという場合が、そのことに相当しよう。

このような状況を表示的には、イメージすることは、あるクラスを定めることであるとしてみよう。そうすると、イメージが実現されるとは、ある個体が、そのクラスに入るか否かということになる。(その場合、その個体は何時存在するようになったかということとはさしおいて)メンバーが一つのクラスを、単一クラスとして認めると、イメージすることと表現されたものとの関係は、クラスとそのメンバーとの関係となり、そこではクラスに入るか否かとなり、そのことを3節では「イメージに合う」と言った。またイメージすることの同一性は、それによって定まるクラスのメンバーの同一性の問題になる。また、個体として実現される以前は、クラスだけが存在し、そのメンバーの存在は不問に付して論ずることができる。(たとえば、空クラスの存在のように)

人間的な創造以前の世界においては、創造されるべきものをそれが入るあるクラスとして、またイメージすることによって規定することはでき、そのことについて語ることはできるが、具体的には個体として与えることはできない。けれども一度与えられてしまえば、その与え

られたものと、はじめに語られていたもの、または語られていたこととの関係は、同一性というよりは、あるクラスに入るか否か、ある条件を満たすか否かということになる。

「あるイメージがあった、そしてそれが今現実化された」という言い方は、「それが」の「そ」が表示を意図していても、全く表示に成功していないが故に、表示的には不適切である。そこで、時間差を考慮し、表示的にも適切な表現は、Prior にならって、「ある対象があるという場合であり (C), そしてそれは私のイメージに合うという場合であり (D), そしてその対象は存在したという場合でない (E)」とならねばならない。この複合文ではすべてが現在時制で語られており、あらゆるものが現在に引きつけられている。今、イメージに合う計画対象が存在し、イメージしていた時点、すなわち過去時点では、そのような対象は存在しなかったということは、Prior にならって、それが存在しないという事実ですら存在しないが故に、「それが存在しないという場合であった (It was the case that there was not one)」とは言えなくて、「それが存在したという場合ではない (It is not the case that there was one)」と解釈せねばならないだろう。<sup>8)</sup>

ここでは計画対象の実現以前の世界について、実現後の世界から語る場合が述べられたが、イメージの表示的非存在性に注意を払うと、現在時点の事実として語る語り方を考慮せねばならないことが明らかとなった。それは、前節における可能な世界の意味論における場合にも似て、過去時点の現在時点への引きつけであった。いわば、非存在なものの存在者への従属とでも言えようか。けれども、筆者の関心は、非存在なものの存在者への積極的なかわりである。イメージすることが計画対象の実現へ果す役割である。それは本節で幾分明らかとなった「ある範囲の確定」ということであろう。この点を次節で検討してみたい。

## 6. 計画対象の表示的実現の前段階としての一般的存在化

時制論理 (tense logic) によれば、過去に私は白い家を狙っており、今白い家を実現されて存在しているとすると、その過去の時点で、今実現されている白い家について特定のもの (表示対象) として語ることはできないと言われる。この説明として Ryle の存在の阻止の例をみよう。ライルという人が存在しているとせよ。そのライル氏の両親が会わなければ、ライル氏はこの世に存在しなかったであろうし、更に、存在しなかったと

か、存在しなくなったということすら言えない。けれども、ライル氏の両親が、たとえば四番目の子供をもうけるかどうかについては語り得る。その場合四番目の子供というのは、いわば漠然とした個体というより、個体化されていないと言うほうが良い。このことを、ライルは、未来時制における言明は、個別的事実 (singular propositions) を伝えることはできなくて、一般的事実 (general propositions) を伝えるだけであると言う。Prior は補足して、「<sup>9</sup> 誰かがライル家の四番目の子供であるということが起こるだろう (It will be that some one is the Ryles' forth son)」は、「ある人が未来にライル家の四番目の子供であるということが、その人について真である (It is true of someone that he will be the Ryles' forth son)」ということ、を伴わない ( $\neg F \Sigma x \Phi x \supset \Sigma x F \Phi x$ )。<sup>10)</sup> すなわち、未来時点での個体領域は、現在時点から見れば、特定化 (個体化) されない。一般的にしか語れないことを意味する。特定化されないということは、逆に、表示しようとしても果せないことになる。したがって、表示的とは現在の時間性を持つと言えよう。一方表示することを意図しない一般名辞は、未来的というよりは、時間的に中立、無時間的であると解される。

イメージすることを複合的一般名辞とする解釈においては、「私」の存在性、「私」が表示されることによって現在性が与えられる。けれども、そこでの青い家も白い家も、その比較ができないという反省により、時間性を保持して「私は白い家を狙う」を「未来に白い家であるものが存在する」とし、形式化して、

$$(6) \quad F(Ex)\Phi x$$

と解釈してみよう。ここに、 $\Phi$ ①:①は白い家である、F:未来、とする。そうすると、「イメージすることがあるなら白い家は存在する」は、「イメージすることがある」を「過去に、未来に白い家であるものが存在する」と解釈すると、

$$(7) \quad PF(Ex)\Phi x \supset (Ex)\Phi x$$

ここに、P:過去、 $\supset$ :条件法 (……ならば……) とする。また「イメージすることが無かったならば、白い家は存在しない」は、対偶をとって、「白い家が存在するならイメージすることがあった」とし、上述の「イメージすること」の解釈により形式化すると、

$$(8) \quad (Ex)\Phi x \supset PF(Ex)\Phi x$$

となる。(6)は、存在量化詞 (Ex) を使用しているが、未来演算子 F によって、特定の個体を表示しているとは言えない。そうかといって、全く表示していないと

いうわけでもない。というのは、(6)は偽であるとも言えないから。いわば(6)は真でも偽でもない。表示される対象すなわち存在量化詞に入る対象は、存在しているとも存在していないとも言えない。それを、ここでは、一般的に存在化していると言おう。すなわち、イメージすることは、計画対象を一般的に存在化せしめることであると規定したい。現在において一般的に存在化されることによって、未来に個別的に存在化される方向付けがなされる。計画対象の実現への道が開かれると考える。この点は、(7)、(8)の真偽を考えた後で触れる。

(7)、(8)の真偽は、時間のイメージによって変わってくる。<sup>10)</sup>一般に一本の直線として時間をイメージすることが行なわれるが、それによると、現在時点と過去時点との間には一本のルートだけが認められ、現在Pであるなら、過去に、未来にPであることは成立する。<sup>12)</sup>すなわち(8)は成立する。ところが、過去に、未来にPであるならば、現在Pであるは成立するとは言えない。現在では未だPでないかもしれない。したがって(7)は偽である。

ところが、時間の枝分かれしたイメージ、すなわち、過去時点と現在時点をつなぐルートは、現在から過去へは一本だが、過去から現在へは多くのルートが考えられるとすると、(8)は、過去時点において見透す未来時点までの道程は、はるかに可能性に充ちたものであり、多くの代替ルート捨てて現時点に到達せねばならなかったから、過去時点で現在時点へ到達することは保証されていないと考えるほうが自然であろう。したがって、(8)は偽となる。また(7)は、過去時点から現在時点へのルートは枝分れしているから、必ずしもこの現在時点へ到達するとは限らないが故にやはり偽である。

けれども時間のイメージを、Prior にならって更に限定してみると(7)は真となる。<sup>10)</sup>すなわち、'...だろう(will)'を'決定的に...だろう(will definitely)'という強い意味に限定する。そうすると、過去に、未来にPであることが決定的であるなら、現在Pであるを意味する(7)は真となる。一方(8)は、このように強い限定を与えても現在Pであることから、過去に、未来にPであることが決定的であったことにはならないので、偽である。

これらのことを合わせ考えると、決定的にイメージすることがあるなら白い家は存在するが、白い家が存在するからと言って、過去に決定的にイメージすることがあったと言うことにはならない。(6)と計画対象の表示の実現との関係は、時間の枝分れモデルの上で、しかも

決定的な未来観念においてのみ考えられることになる。(6)を一般的存在化と言えるのは、ひとつには、この決定性によるからであると言えよう。

代わりに：狙うということが、(6)のように形式化されるか否かは問えば問える。それは今後の課題としたい。更に、このような分析が、設計-計画の過程にどのように取り入れられるかについても、今後の課題としたい。

註

- 1) 拙稿「設計イメージの実現化の手續に関する研究」福大工学部紀要第1号, 1979.3  
拙稿「計画における意義行為と表示行為(その1)」日本建築学会論文報告書第277号, 1979.3  
拙稿「計画における意義行為と表示行為(その2)」日本建築学会論文報告集第278号, 1979.4
- 2) クワイン「論理学的観点からI章, 何が存在するかについて」岩波書店, 1972.10.(1953)
- 3) クワイン「論理学の哲学」培風館, 1972.6.(1970)
- 4) J, Hintikka 『Existential Presuppositions and uniqueness presuppositions』in 『Models for modalities』, D Reidel, 1969
- 5) 様相深度: 様相演算子の重複個数を1として, NをKdと読み変えると,  
$$\sim (Ex) Kd (x=b) \vee p (b/x)$$
  
は,  
$$(Ex) Kd (x=b) \supset p (b/x)$$
  
となり, 前件が成り立てば, 後半はpは唯一の個体を表示すると言っている。したがって, 存在的に一般化しても良いことになる。
- 6) ヒンティッカ「認識と信念」紀伊国屋, 1975, 11(1962)
- 7) ヒンティッカによる矛盾の否定による存在的推論があり, ここでの結論より少し緩い。詳しくは, 拙稿「設計-計画における『総合』について」日本建築学会中国支部研究報告集第7巻第2号, 1980, 3並びに, そこでのヒンティッカの引用文献を参照
- 8) A, Prior 『Identifiable individuals』in 『Papers on time and tense』 Oxford Univ. Pr., 1968
- 9) G, Ryle 『‘It was to be’』in 『Dilemmas』 Cambridge Univ. Pvy, 1954
- 10) A, Prior 『Past present and future』 Oxford Univ. Pr., 1967
- 11) 中村秀吉「時間のパラドックス」中央公論社, 1980
- 12) pは  $(Ex) \Phi x$  の省略記法とする